昭和49年5月1日発行（毎月1回1日発行）第23巻・第5号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

リパブリック
P-47D



☆特集☆
海上自衛隊の翼たち　UF-2／P2V-7
ソ連の新型戦闘機を斬る　ミグ系各機
全木製の基本練習機東京キ107の詳細

'74 MAY 5

$3.30

海上自衛隊の翼たち



エプロンに並ぶ大村航空隊第1飛行隊のグラマンUF-2。現在，海上自衛隊は本機を5機装備しており，すべて大村航空隊に所属している。白とシープレーングレイの機体に，デイグロウの帯が鮮やかである。

JMSDF Grumman UF-2 Flying Boats at Ōmura station, 21st February 1974.

 Lockheed P2V-7 of JMSDF No. 3 Squadron, Atsugi station, February 1974.



下総から厚木に移動した第4航空群第3航空隊のP2V-7(上)と，同じく第14航空隊のS2F-1(下)。P2V-7，S2F-1とともに海上自衛隊を代表する機体であるが，現在すでにP-2Jに代替されつつある。



Grumman S2F-1 of



UF-2 of JMSDF Ōmura Kokutai (Squadron) with JATO equipment. Ōmura Station, Feb. 1974.

〔上〕胴体後部にJATO (Jet Assisted Take Off) を装備したUF-2(オ-9053-USN.BuNo.148326)。JATOは13秒間燃焼の離陸(水)促進用補助ロケットで、UF-2はこれを胴体後部のキャビン・ドア(左舷)ならびに緊急用ドア(右舷)に各2基ずつ装備でき、滑走距離を大幅に短縮するのに役立っている。

〔下〕自衛艦の対空射撃訓練の支援に厚木から飛来したS2F-U。S2F-Uは、S2F-1からソナー、MADなどのASW装備を取外し標的曳航のための装備を設けた改造機で、主として艦船の対空射撃訓練の標的機に使用されており、第61航空隊に所属している。

S2F-U from JMSDF Atsugi Station at Ōmura Station, Feb. 1974.



在英アメリカ空軍のファントム



USAF F-4D Phantoms of the 48th TFW taken at RAF Lakenheath, Suffolk, England.

イギリス東部のサフォーク州にあるラッケンヒース空軍基地に駐留する米第48戦術戦闘連隊（48th TFW）所属のF-4Dファントム II（シリアル50775）。

(Photo: Inter-Air Press)



Sikorsky HSS-1N of JMSDF, Ōmura Kokutai, 2nd Flight.

〔上〕大村航空隊第2飛行隊のシコルスキHSS-1N。長らく使用され続けたHSS-1Nも，現在では3機を残すのみとなっており，大村航空隊でも新鋭のHSS-2にとって変わられつつある。この8569号機は，三菱重工で生産された最終号機である。

〔下〕厚木航空基地隊の救難ヘリコプタ，シコルスキS-62A。S-62は海上自衛隊航空基地に救難用として配置されているが，大村，小松島などはASW用のヘリコプタを持っているため特別に救難用ヘリは所有していない。

S-62A of JMSDF Atsugi Kokutai.





Take-off shot of F-4D 50-659 and 65-614 of 48TFW.

前ページと同じくラッケンヒース空軍基地
のF-4D 2機 [illegible]
[illegible] Air Force)



Badge of 48TFW — "The Statue of Liberty Wing" on F-4D 66-747.

〔上〕第48戦術戦闘連隊（TFW）のエンブレム。第48TFWは1959年以来F-100スーパーセイバーを持ってこのラッケンヒース英空軍基地に駐留しており，1971年初めに，15年間も使いなれたF-100を現在のF-4Dに改変している。"自由の女神"が同連隊のシンボル。

〔下〕同じく同連隊機の尾部。テイル・レターは"LN"。写真の機体はシリアル66-747である。

（Photos: Inter-Air Press）

Tail of 66-747 F-4D of 48TFW.





Supermarine Scimitar S.1 of 803 Squadron, RNAS Lee-on-Solent, June 1967.

Gloster Meteor F.8(WH291) of 79 Squadron, RAF Chivenor, Aug. 1971.



グロスター　ミーティアF.8(WH291)。1971年8月にチベノア英空軍基地で撮影した第79スコードロン所属機。本機も現在は退役している。

(Photo; U.W. Moggridge)



... June 1986.

これも現在は退役しているグロスター・ミーティアTT.20。1986年6月の撮影。
(Photo: G. W. [illegible])



Buccaneer S.2A XV341 of Honington Wing on Lakenheath Armed Forces Day, Aug. 1973.

ブラックバーン バッカニアS2A(XV341)。昨年8月18日のラッケンヒース空軍基地公開日に展示された1機で，ホニントン・ウイング所属機 (Photo Inter-Air Press)



Lancaster B.I PA474, KM-B now based with RAF Battle of Britain Flight at Coltishall. Taken at RAF Lakenheath, [illegible]

ランカスターB.I(PA474)。これも昨年5月のラーケンヒース空軍基地公開日に展示された機体で、現在でも飛行しているランカスターの1機。

(Photo: [illegible])





Hawker Hart of 57 Squadron, RNAS Yeovilton, July 1971.

〔上〕ホーカー　ハート。1971年7月にヨービルトン海軍基地で撮影した第57スコードロン所属機。同機は退役して現在英空軍博物館に保管されている。

〔下〕フェアリィ　ソードフィッシュ（NF389）。1965年7月にリー・オン・ソレント海軍基地で撮影。本機も現在は除籍されている。（Photos; C.W. Moggridge）

Fairey Swordfish NF389, RNAS Lee-on-Solent, July 1965.





Northrop's first YF-17 is nearing completion at the company's manufacturing facility in Hawthorne

Northrop's first YF-17 is nearing completion at the company's manufacturing facility in Hawthorne.

完成まじかのYF-17 1号機



カリフォルニア州ホーソンのノースロップ社工場で完成まじかいYF-17軽量戦闘機の1号機。同機は4月初めにロールアウトしてエドワーズ空軍基地で初飛行，飛行テストに入ることになっている。後方に見えるのは2号機の胴体。本機に関しての詳細は本文55ページの記事を参照して下さい。



近着ソ連機スナップ集

MiG-21とSu-7B戦闘機

MiG-21 Fishbeds displayd Soviet Army and Navy Day, February 23, 1974.

2月23日のソ連陸海軍記念日に飛行ショーを行なったMiG-21。写真上は演技のために誘導路から滑走路に向うところ。ドラッグ・シュートを装備して，垂直尾翼前縁を前方にのばしたNATOでフィッシュベッドEと呼ばれる型である。次ページ上の写真は飛行ショーを終えて着陸したスホーイSu-7B。NATOでフィッターBと呼んでいる可変翼のSu-7Bと思われるが，胴体上部がふくらんで，新しい艤装をしているようである。(TASS)



Su-7B (Fitter-B) variable-geometry aircraft, on Soviet Army and Navy Day. (TASS)

MiG-17戦闘機

MiG-17 on take off.

離陸するMiG-17。老兵となったMiG-17だが，まだソ連国内でも数多く就役しており，飛行ショーでも新型機にまじってデモ飛行を行なっている。写真は訓練飛行中の1機。(APN)







Sukhoi Su-7Bs on the Soviet Army and Navy Day, Feb. 23, 1974.
⬆ Brief ing before flight.
⬇ Just before a flight.

飛行ショーのSu-7B

写真上と左も，前ページと同じく２月23日のソ連陸海軍記念日に飛行展示を行なったスホーイSu-7B。上は飛行前のブリーフィング，左はパイロットが乗り込んでスタートするところ。本機はただ今前線航空軍団の第一線主力戦術支援機。MiGとともにこの種の飛行ショーには必らず顔を出している。（TASS）

ミヤシシチェフM-50実験機

Myasishchev M-50 (Bunder).

1958年にタイプ103-Mの呼称で作られたのが本機。デルタ翼の大型爆撃機で，NATOではバウンダーの名称で呼ばれた。その後，飛行テストでいくつかの世界記録をたてたのみで量産には入らず，空中給油機に改造されたという説もあったが，いまでも実験機として使われているようである。ソロビヨフD-15エンジン4発で，2基を両主翼端につけるという変った方式である。(APN)





ソ連の新型輸送機オンパレード

⬆ Ilyusin Il-76 Cargo Transport.
⬇ Tupolev Tu-144 Supersonic Transport.





NEW PLANES OF AEROFLOT At the Aviation Exibition at Sheremetyevo airport. (Photos by TASS)

去る2月，シェレメチエフ空港で開催されたソ連民間航空省主催の航空機展示会でのスナップ。昨年1年間の輸送実績が旅客8,400万，貨物220万トンというマンモス・エアライン アエロフロートで就航中の大型の新鋭輸送機が顔をそろえたデッかい展示会であった。左ページ上は4発ジェットの貨物輸送機Iℓ-76(上)とTu-144。上の写真ではTu-144，Iℓ-76，Iℓ-62，Tu-154とアエロフロートのスターたち。パリ・ショーでの墜落原因はまだ解明されていないが，Tu-144の就役計画は予定どおり進められているようだ。





First YF-17 aircraft. Seen beside is its wing trailing edge flap. (Northrop Photo)

YF-17 1号機と米海軍のEP-3E

〔上〕23ページと同じくノースロップの工場で最後の仕上げにかかっているYF-17 1号機。手前は同機に装着されるグラファイト製の主翼後縁フラップ。

〔下〕このほど厚木基地で撮影した米海軍のEP-3E。尾翼にバニーのマークをつけた第1艦隊飛行隊(VQ-1)の所属機。

EP-3E Orion of VF-1. (Photo by Y. Takeuchi)



UF-2 “かりがね”が建在な大村航空隊



JMSDF air base, Omura, Kyushu. The UF-2 KARIGANE, JMSDF "veteran airplane" is still on service.

カメラ・ルポ






53


オ
9055
海上自衛隊
オ
9054
海上自衛隊



佐世保地方隊の指揮下にある大村航空隊は海上自衛隊における飛行艇部隊発祥の地ともいえるが、同時に大村は飛行艇要員養成の基地ともなっている。現在、第1飛行隊はＵＦ-2水陸両用機を5機、第2飛行隊はＨＳＳ-1Ｎを3機と新鋭対潜ヘリコプタＨＳＳ-2を8機装備して、本来の対潜哨戒／輸送任務のほか、付近に医療設備のない離島が多数あるため患者輸送等の災害派遣にも活躍しており、平均して年間30件程度の出動があるという。

前ページおよびこのページは、いずれも第1飛行隊所属のＵＦ-2で、写真上はＪＡＴＯ(Jet Assisted Take-off)を使用して離水するところである。ＪＡＴＯは左右の胴体後部作業用ドアに各2基ずつ装着可能で、これを使用した場合の離陸滑走距離はわずかに700ft（215m）といわれる。右の写真は、右舷の非常用ドアと、その下に装着されたＪＡＴＯ1型。なお、非常用ドアは内側に開く型式であるため、1基だけのように見える。









上と右の写真は第２飛行隊所属のＨＳＳ-2対潜ヘリコプタ。ＨＳＳ-2は昭和48年３月１日から第２飛行隊に配属が始められたもので旧式のＨＳＳ-1Ｎに代わって主力となりつつある。上は滑走路上でタッチ・アンド・ゴーの訓練を行なうＨＳＳ-2。スポンソン外側にフロート・バッグを装備していることに注意。

下は退役の日も近いＨＳＳ-1Ｎ。現在は３機が残るのみで、この対潜ヘリの基本となったＨＳＳ-1Ｎも49年中には姿を消すことになる。写真の8569号機は1963年１月に製造された機体で三菱重工で組立てた同シリーズの最終号機である。



海上自衛隊　第 4 航空群

The 4th JMSDF Koku-gun (Air wing) of Shimoosa recently moved to Atsugi JMSDF Base.



カメラ・ルポタルタージュ　厚木基地


42


4123


24
3
4624





下総基地の航空集団司令部と第4航空群の主力が移駐して充実した海上自衛隊厚木基地。現在厚木基地には第4航空群れい下の第3航空隊と第14航空隊のＰ２Ｖ-7、Ｓ２Ｆ-1が顔をそろえ、第61航空隊のＹＳ-11、Ｓ２Ｆ-Ｕとともに任務についている。そのほか同基地の航空機は救難飛行隊厚木航空基地隊のＳ-62。これはこのほど同基地で撮影した各機の"表情"である。

43ページと左ページ上・中は第14航空隊のＳ２Ｆ-1。同航空隊には2月中旬、新たにＴ-34　1機が配備された。このページ上は救難飛行隊のＳ-62。このＳ-62も近く2機に強化される。左ページ下とこのページは第3航空隊のＰ-2Ｖ-7。現在同航空隊には同機が6機配備されている。





在英米空軍ファントム部隊



イギリスのサフォーク州にあるラッケンヒース空軍基地は在英アメリカ空軍最大の航空基地。大戦前からの伝統ある米第48戦術戦闘連隊がF-4DファントムIIを持って駐留しているが、ここに紹介するのは、昨年8月に撮影したその訓練の模様である。

1941年11月にミルデンホール空軍基地の衛星基地として建設されたラッケンヒース基地には、大戦中は英空軍の爆撃部隊である第149スコードロンの一部が配備され、ウェリントン、スターリングなどの爆撃機が幾度となくドイツの空に出動している。戦後の1948年夏、同基地は米空軍爆撃部隊の駐留基地に選定され、一時戦略空軍部隊が駐留したが、1959年秋に第48戦術戦闘連隊がF-100を持ってフランスから移駐、家族のための病院や学校も建てられて、いまではイギリスでもっとも充実した施設をもつ米空軍駐留基地である。





USAF F-4D Phantoms of 48th TFW, RAF Lakenheath, Suffolk, England, 18 August 1973. (Photos by Inter-Air Press)

〔上〕2機のF-4Dの編隊離陸。手方の機体はシリアル65-0659、後方の機体は65-0614である。〔左下〕着陸するF-4D。タッチダウンの瞬間で、ドラッグ・シュートが顔を出したところ。上の写真手前と同じ65-0659機。〔下〕ドラッグシュートを引いて着陸滑走。上の写真後方と同じ65-0614機。なお尾翼に記入しているシリアル・ナンバーは、65-0614が「65-614」、65-0659が「50-659」と異なった記入のしかたをしているのに注意。

↑Two F-4D Phantoms of the 48th TFW on take off roll at Lakenheath. ←F-4D 65-0614 on landing roll with tail chute fully deployed. ↓F-4D 65-0659 just after touchdown with tail chute in process of deployment.





〔上〕前ページと同じくラッケンヒース空軍基地の第48戦闘連隊のF-4D。シリアル65-0775。

〔右・下〕同じく第48TFWのF-4Dの尾部クローズアップで、右は65-0775機、下は66-7747機。

第48戦闘大隊は1972年1月に、このラッケンヒース基地で、1956年以来16年間も使いなれたF-100を現在のF-4Dに機種改変した。同連隊はF-86セイバージェットで朝鮮戦争にも参戦、数多くのミグを撃墜しているが、それ以来、カラー写真にあるように"自由の女神"を部隊のエンブレムにしている。





(Top) Starboared si
front view of F-4D 6
0775 of the 48th TF
↑Port side fin mark
ings on F-4D 65-077
↓Starboared side fi
markings on F-4D 66
7747. (Photos by In
Air press)

ヘリ巡洋艦"ジャンヌ・ダルク"が来日



R97 Jeanne d'Arc moored at Tokyo Port, 19 February 1974.



2月中旬に来日、東京港晴海埠頭で公開されたフランスのヘリコプタ巡洋艦ジャンヌ・ダルク（R97）。同艦は対潜・揚陸作戦用に1964年に建造されたもので、戦時にはヘリコプタ8機を搭載して作戦にあたるが、今回は訓練をかねての親善訪問。搭載機はアルーートIIIが2機、SH-34が4機の計6機。同艦はSA321シュペルフルロン・ヘリも6機を積むことが出来るが経費節約のため、訓練航海はSH-34で行なっているという。写真上は指令室から望んだ後部の飛行甲板。

写真上は後部甲板リフト上のアルーエトIII。このリフトはアルーエトIIIとSH.34は同時に2機を乗せることができる。写真下は甲板上で整備中のSH.34。右は艦首から見たジャンヌ・ダルクの全姿。写真は2月19日の撮影。





フォート ニュース PHOTO NEWS



〔上・下〕イギリスのケンブリッジシャー州ダックスフォード英空軍基地に保管されているP-51Dムスタング。同機はカナダ国防軍から帝国戦争博物館に寄贈されたもので、2次大戦中にダックスフォードを基地に活躍した米第8空軍第78戦闘大隊の司令官ジョンD.ランダース中佐機の塗装にして展示されている。(カラー・ページ参照)

↑↓The P-51D Mustang in these photos was presented to the Imperial War Musium by the Canadian Armed Forces. It has been restored and repainted to represent the 44-72258 of the 84th FS, 78th FG USSAF, the aircraft flown by the last commander of the 78th FG, Lt. Col. John. D. Landers. (Photos by Inter-Air Press)





〔右〕ソ連のツンドラ平原地方の油田開発に活躍しているアントノフAn-22アンテイ巨人輸送機。パイプ敷設機械、トラック雪上車などの大型機材を巨体に飲み込んで厳寒の空を飛んでいる。
（TASS）



〔左〕ヤコブレフが設計開発を進めている新型旅客機Yak-42の完成模型。同機はD-36ターボファン・エンジン（推力14,200ℓb）3発の中型旅客機で、乗客100〜120人乗り。1号機の初飛行は1976〜77年頃に予定されている。3発になって大型化したが、模型でもわかるようにYak-40に非常に似かよった外形の機体である。

〔下〕タシケントの飛行機整備工場。アエロフロートや外国の各機が並んで整備を待っている。
（TASS）





〔上〕ロッキードでは、ただいまカナダ国防省にP-3Cオライオン対潜機を売り込み中であるが、これは一足はやく同国国防軍の塗装にしたP-3C。写真にマークを書き入れたPR用スチールである。〔右〕米ソ共同の宇宙船、アポロとソヨーズは1975年に打上げられるが、写真はロッキードの技師が模型を使って行なっている両宇宙船のドッキング・テストの模様。ロッキードではこれまで連邦航空宇宙局の委託で、アポロ・スカイラブのドッキング試験も行なっている。





〔左〕ワイド・ボデイ輸送機エアバスA-300Bは、すでに原型4機が完成、飛行テストを行なっているが、写真はツールーズの生産工場の模様。5号機から9号機が最終組立てに入っており、手前は主翼がついた9号機の中部胴体、その後方は8号機。形をととのえつつあるのは5、6、7号機である。
〔下〕スペイン空軍が購入したビーチ　キングエアC-90。同空軍では8機を購入して計器飛行訓練に使う。





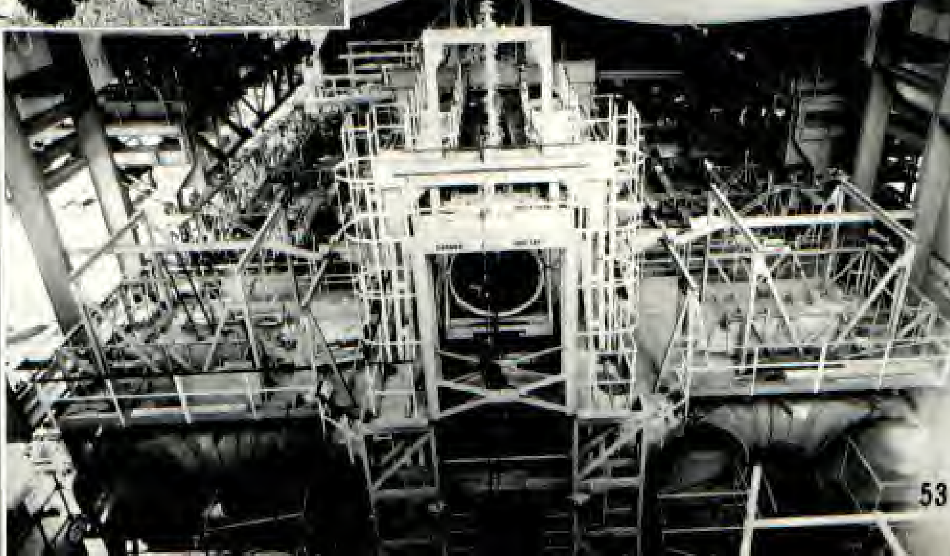


〔上〕ロッキード・エアクラフト・サービス(LAS)が設計製作することになった航空機用地上牽引車の完成図。同サービスでは米航空庁との契約にもとずき、空港周辺の騒音と大気汚染防止さらに航空機の燃料節約をねらった地上牽引車の開発を進めており、12カ月にわたる研究成果をまとめて、近く数種のタイプを試作することになった。写真はその一つの完成予想図。



〔上〕米海軍の高速艦建造計画に応札するために、ロッキード・ミサイルズ・アンド・スペース社（LMSC）が研究開発を進めている高速艦の完成図。同艦は艦体と海面の間につくられる空気クッションの上を走る「表面効果艦」（SES）。2千トン級で、現用の米海軍高速艦艇の2倍の性能をもち、対潜作戦などに使われる。

〔左〕去る1月12日から26日までオーストラリアのウェイクリィで開かれた第14回世界グライダー大会に参加した日本チーム。この大会で松戸市在住の藤倉氏（写真左から2人目）は1月17日.595kmを飛んで長距離の日本新記録をたてた。これまでの日本記録は1963年の第9回大会で小田氏が記録した483kmである。



〔右〕このいかつい装置はコンコルドの温度テストリグ。英国ファンボロの王室航空機研究施設（RAE）にそなえられており、コンコルドの実物を使用して超音速および亜音速飛行で変化する温度の状態を再現、機体にあたえる影響を調査研究するもの。フランスのツールーズにある構造テストリグとともに、コンコルドの安全な運航を支える重要な装置である。

スナップ　だより



TA-4F Skyhawk flying over NAS Atsugi.

〔上〕厚木基地で整備を終えて飛行中のＴＡ-4Ｆスカイホーク。機首の空中受油棒が、Ａ-4Ｍと同じものになっているのに注意（昭島市・山内裕之）。〔下〕沖縄の嘉手納基地で撮影したＰ-3Ｂオライオン。第４哨戒飛行隊の所属機で、尾翼のマークが面白い（東京都・林彰）。



P-3B of VP-4, Kadena AFB, 20 Dec, 1973.

〔下〕新潟空港に毎週乗り入れているアエロフロートのＴu-154。11月23日の撮影（市川市・浮乗英之）。

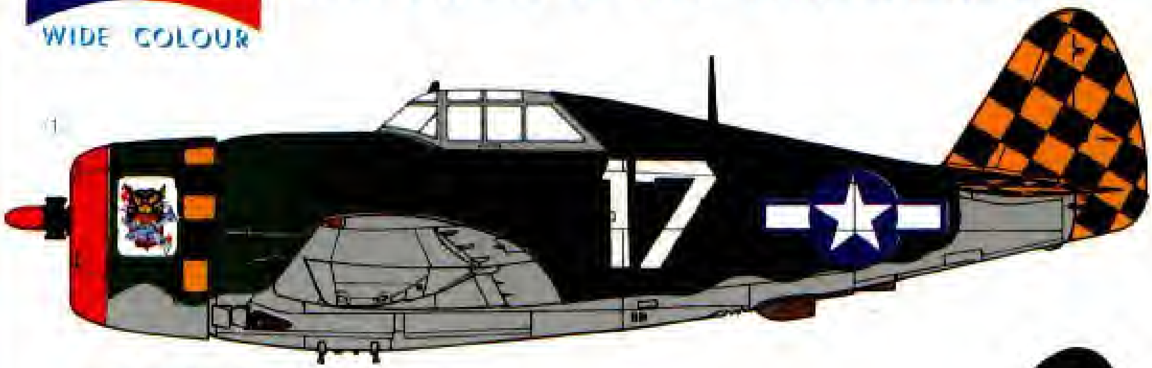
Tu-154 of Aeroflot, Niigata Airport, 23, Nov. 1973.



ワイドカラー
WIDE COLOUR

REPUBLIC P-47D THUNDERBOLT

①



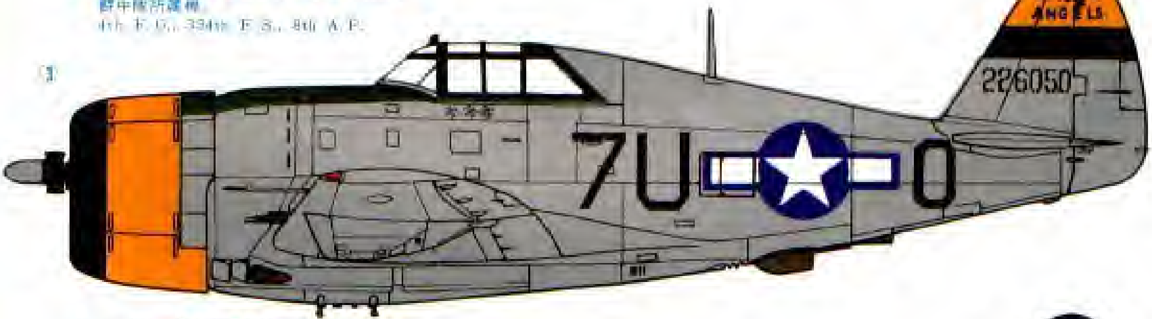
① P-47D，第12空軍第325戦闘大隊第317戦闘中隊所属機。
325th F.G., 317th F.S., 12th A.F.

②



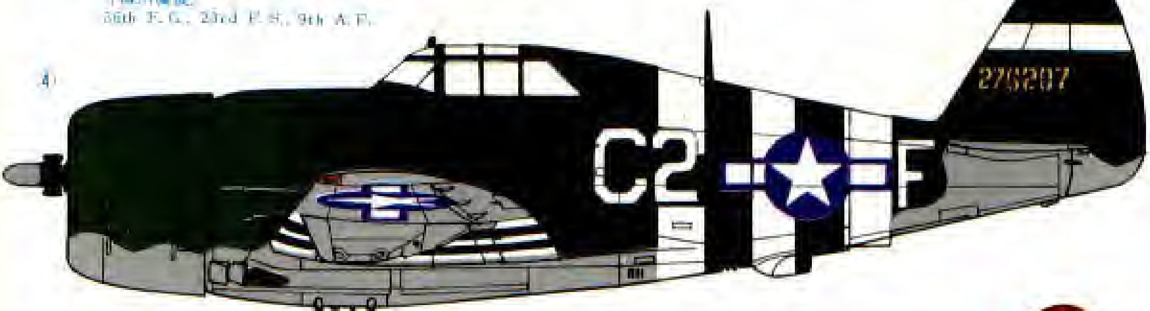
② P-47D，第8空軍第4戦闘大隊第334戦闘中隊所属機。
4th F.G., 334th F.S., 8th A.F.

③



③ P-47D，第9空軍第36戦闘大隊第23戦闘中隊所属機。
36th F.G., 23rd F.S., 9th A.F.

④



④ P-47D，第9空軍第368戦闘大隊第396戦闘中隊所属機。
368th F.G., 396th F.S., 9th A.F.

⑤ P-47D，第9空軍第362戦闘大隊第379戦闘中隊所属機。
362nd F.G., 379th F.S., 9th A.F.

⑤



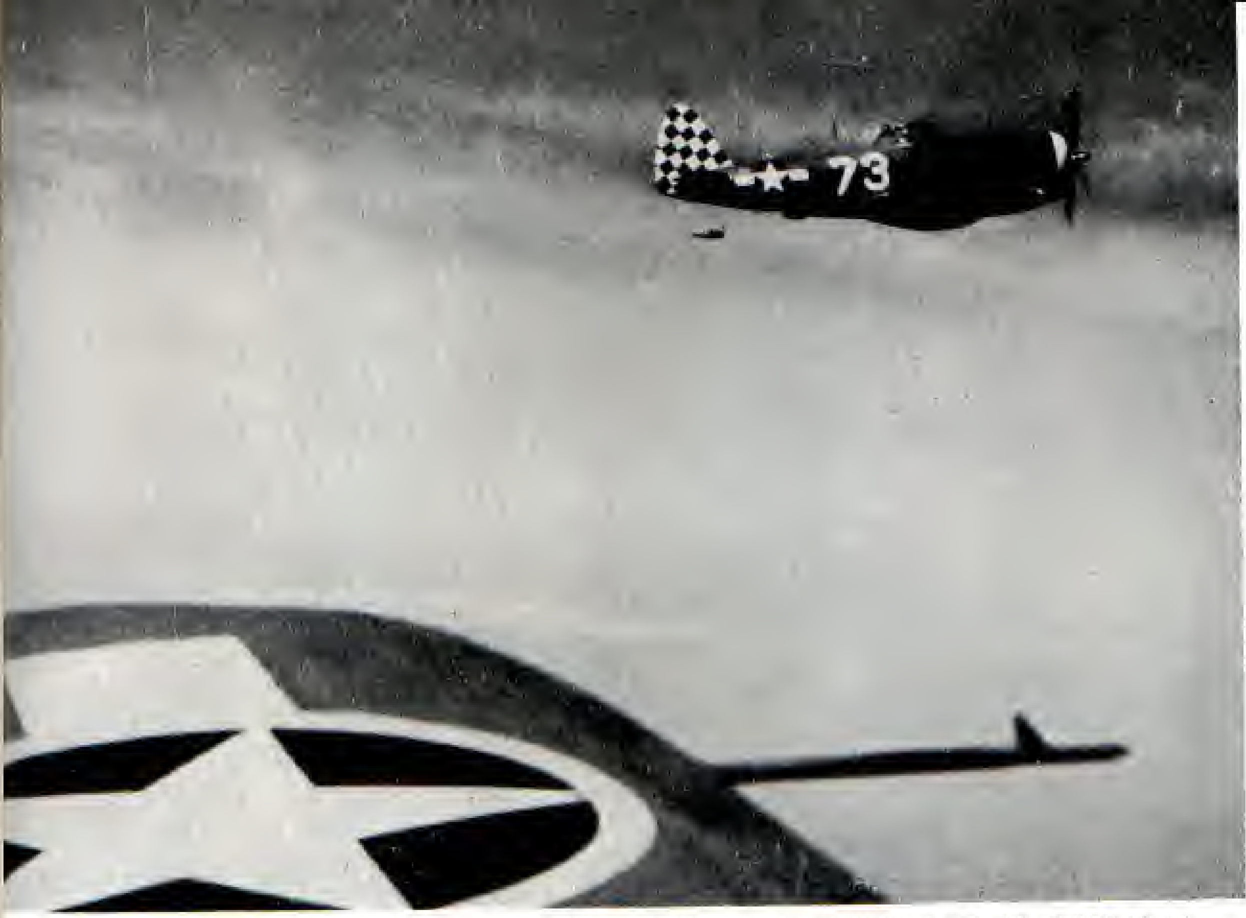
K. Hashimoto



REPUBLIC P-47D THUNDERBOLT.
リパブリックP-47Dサンダーボルト

（上）ヨーロッパ戦線で活躍したP-47D。第8空軍第56戦闘大隊の所属機で，主翼下に爆弾を吊して出撃するところ。1944年末，フランスの前進基地でのスナップ。

Ready for their bombing mission. P-47D's of 56FG, 8th AF. (USAF Photo)



P-47D's of 325FG "Checker Tail Clan," 15th AF. (USAF Photo)

〔上〕爆撃機の援護に出動。"チェッカー・テイル・クラン"のニックネームで勇名をはせた第15空軍第325戦闘大隊の所属機。イタリー戦線にて。

〔下〕これもB-17爆撃機の援護に出動するP-47D。第8空軍第78戦闘大隊第84戦闘中隊の所属機。手前に主翼の見えるB-17からうつしたもの。1943年6月10日の撮影。

P-47D of 78FG, participating in bomber escort mission. (USAF Photo)



REPUBLIC P-47D THUNDERBOLT



米空軍の第58戦闘大隊のれい下に入って、1945年から太平洋方面に派遣されたメキシコ空軍第201戦闘中隊所属のP-47D。



P-47D, 78FG, 83FS, 8AF.

イギリスのダックスフォードを基地に活躍した
米第8空軍第78戦闘大隊83戦闘中隊のP-47D。



Warming up for take off; P-47D's of 1st Brasilian FS. (USAF Photo)

〔上〕出動準備中のP-47D。1944年10月にイタリー戦線に派遣されたブラジルの第1戦闘中隊所属機。同中隊は米第12空軍のれい下に入って同年11月11日に初出撃した。写真はそのころのシーンである。

〔下〕ぬかるみのエプロンに翼を休めるP-47D。増槽と爆弾を装備して待機中のもので，これもイタリー戦線の第12空軍第57戦闘大隊の所属機。

P-47D's of 57FG, 12AF sit patiently in the mud waiting for next assignment. (USAF Photo)





P-47 of 353FG 8AF with the installation of cluster of 20 twenty-eight lb bombs under the wing. (USAF Photo)

「上」 主翼下に28ポンド爆弾20発の弾架を吊したP-47D 第8空軍第353戦闘大隊の所属機。

「下」 両主翼下に2,100ポンド爆弾を1発ずつ吊して出動。第9空軍第358戦闘大隊所属機。1944年6月の撮影

P-47D "CHUNKY" belived to be a plane of 358FG 9AF. Bombed up in June 1944. (USAF Photo)





F8F-1 BEARCATs of USN Air Reserve.



GRUMMAN F8F-1 BEARCAT

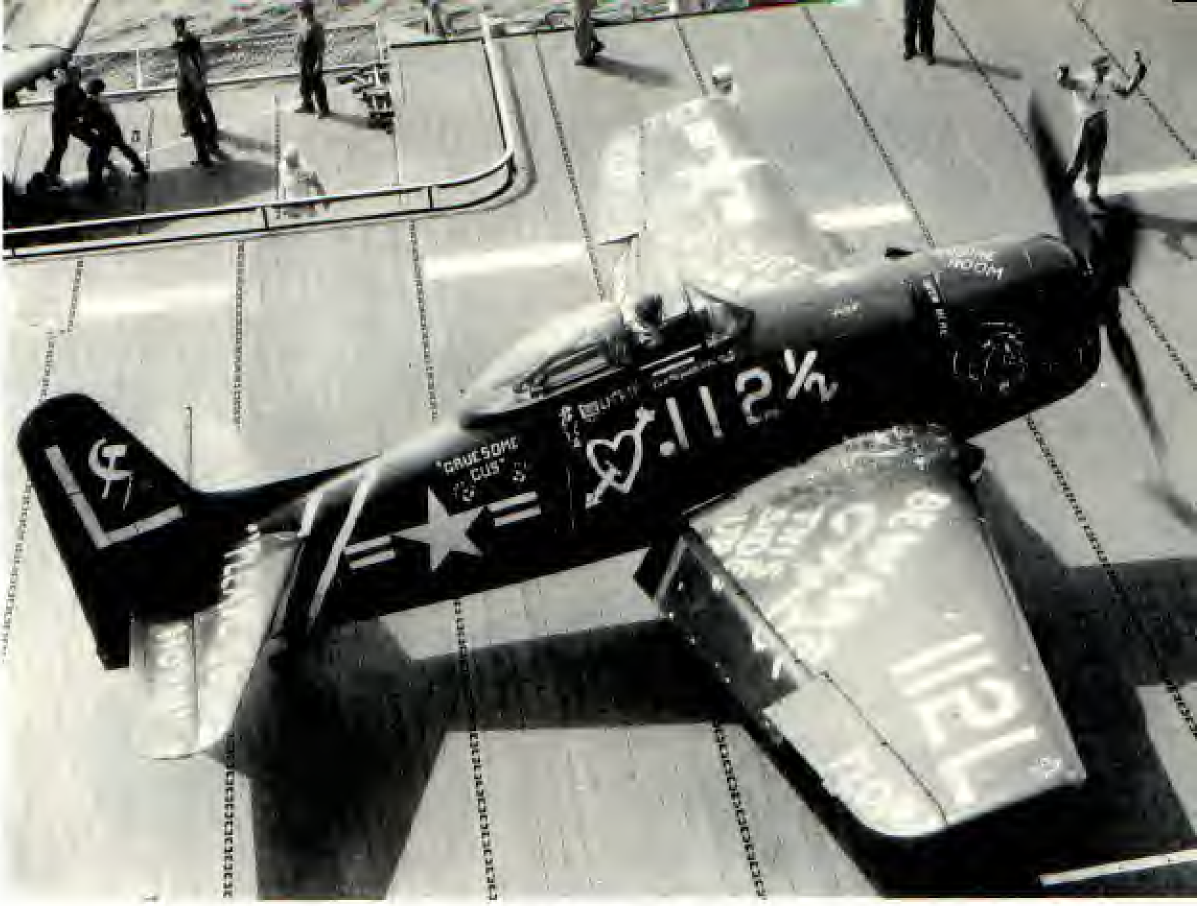
グラマンF8F－1ベアキャット



GRUMMAN F8F-1 BEARCAT
グラマンF8F-1ベアキャット

F8F-1s of Naval Air Reserve, Glenview, Illinois.

F8Fベアキャットは F6Fの後継機として小型空母からの作戦を考慮して作られた迎撃戦闘機。F6Fと同じR-2800エンジンを装備していたが，外形はひとまわり小さく，とくに上昇力にすぐれた俊敏な機体となった。海軍への引渡しが開始されたのは1945年の2月，最初の部隊が編成を始めたのは5月末で，2次大戦の戦場に登場する機会はなかった。写真上はグレンビューのリザーブ（予備役）部隊配備となったF8F-1。空母バーレイフォージの上を飛行中。



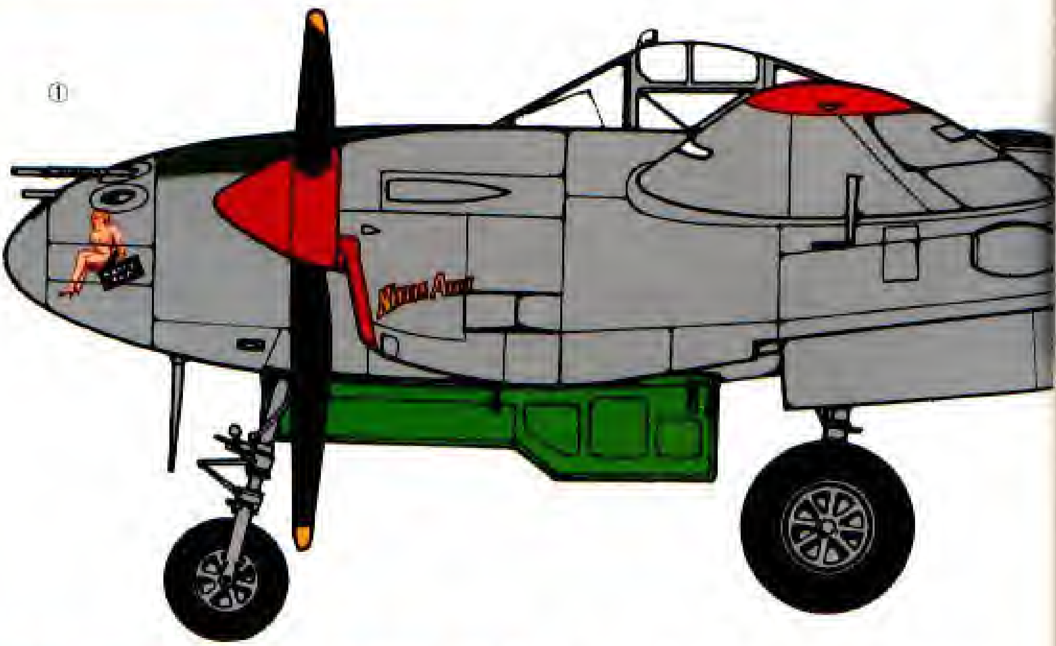
F8F-1 of US Naval Air Reserve on boared CVA-32 Layte, 1947.

F8F-1は2,023機発注されたが，終戦で765機に削減された。その後グラマンでは1949年5月までに，主翼の12.7mm機銃4挺を20mmにしたF8F-2を293機，夜間戦闘型を12機，写真偵察型のF8F-2Pを60機作っている。1949年までにF8F-1は24個中隊，-2は12個中隊余りに装備されたが，逐次第一線を退いて1952年にはほとんど退役した。

写真上は空母レイテ号上のF8F-1。これもリザーブ部隊配備となった1機。終戦2年目の1947年の撮影。戦火が遠のいたゆとりか，機体全面にいっぱいの落書きをしている。



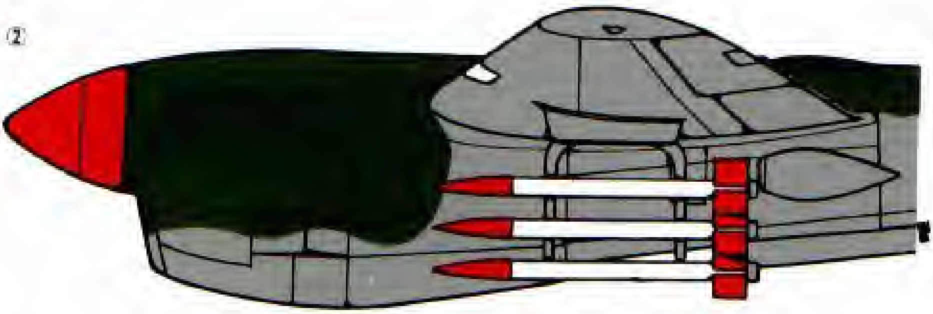
①



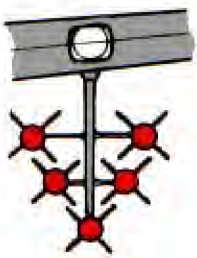
LOCKHEED P-38J LIGHTNING

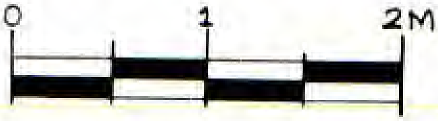
1/32 SCALE KIT

②

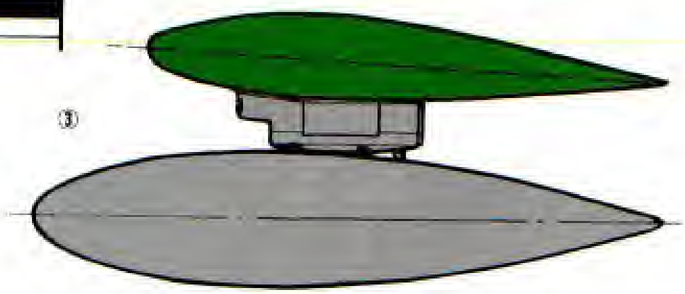


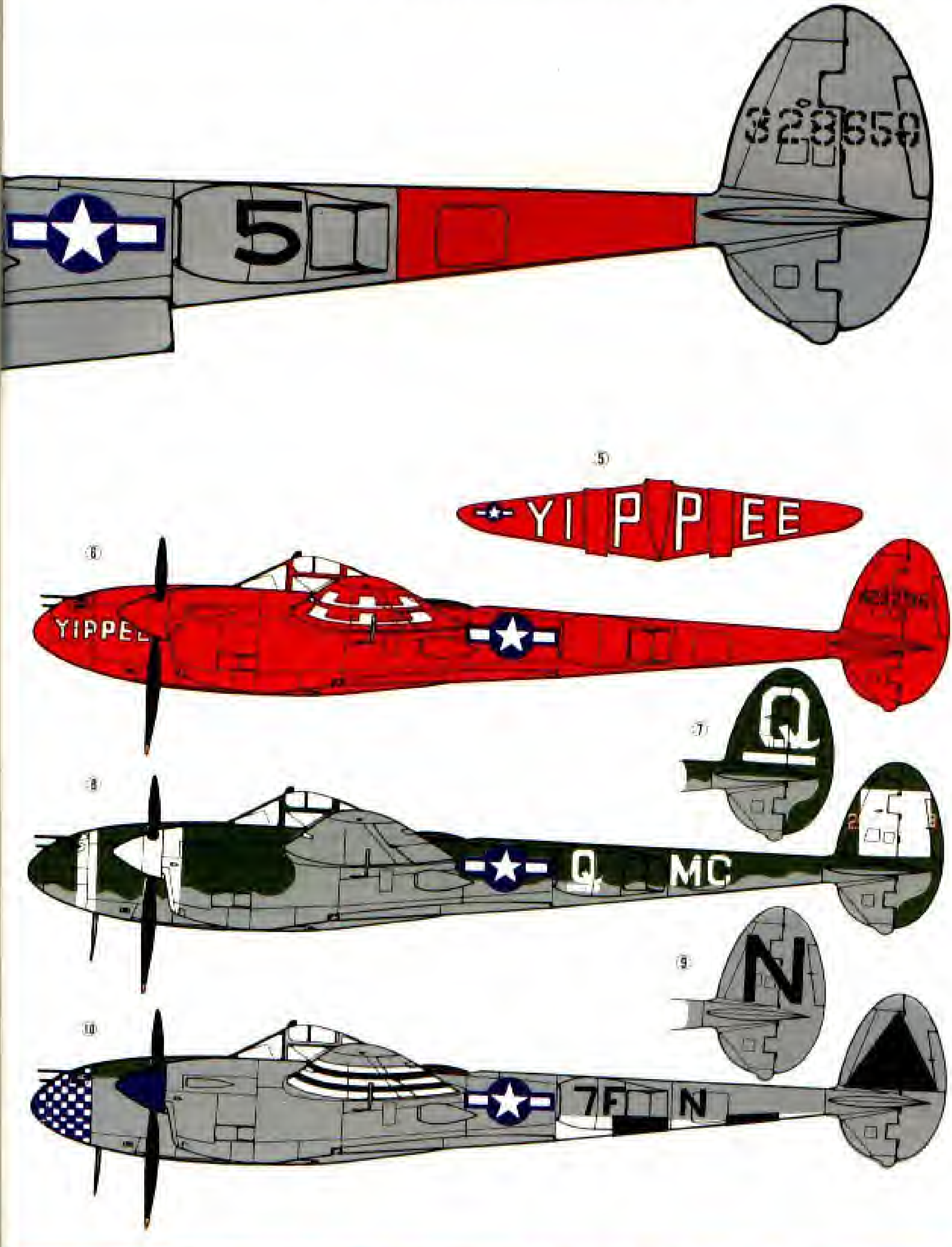
④





③





① P-38J [illegible]
1st F.G. 27th F.S. [illegible]
② [illegible]
[illegible]
③ [illegible]
Jettisonable drop tank
④ [illegible]
Rocket launcher [illegible]
⑤ [illegible]
Wing under surface
⑥ [illegible]
Production No. 5 000th P-38 "Yippee"
⑦ [illegible]
[illegible]
⑧ P-38 [illegible]
[illegible]
⑨ [illegible]
[illegible]
⑩ [illegible]
[illegible]

ハイモデリングのための
レベル資料集

リパブリックP-47Dサンダーボルト

REPUBLIC P-47D THUNDERBOLT



☆キットの紹介

レベルの1/32シリーズにP-38Jのデラックス・キットが発売中なのはご存知だろうか。キットの内容は例によって精巧なコックピットやエンジンを内蔵。可動部はプロペラと車輪のほか，キャノピーのハッチが開閉する。

デカールは40機撃墜のエース，ボング少佐機と，フラ・ガールのマーク付の第５空軍第475戦闘大隊第433戦闘中隊機，および第９空軍第370戦闘大隊所属機の３種が附属。大型カラー図もついている豪華版である。

☆塗装について☆

図①　P-38J　第15空軍第１戦闘大隊第27戦闘中隊の所属機で，塗装は全面がシルバー⑧，スピナとエンジンのエア・インテイク前部および胴体後部が赤③－㉖で，主翼翼端の上下面も赤。機首の光線反射よけはアンチグレア・グリーン⑥＋④－⑦＋⑳，脚カバーなどの機体内部はイエローグリーン㉗，機首に記入されている金髪美人はリアルなタッチで画いてある。

図②と④　このモデルをＬ型などのロケット弾装備機に改造するときは，図のようにロケット弾架を自作し，太いランナーなどでロケット弾を作って片翼に５発ずつ装備すると，P-38のバリエーションが楽しめる。

図③　左右のエンジンと中央胴体との間の主翼下面に装備する増槽，増槽架と増槽を木などの材料で自作すると，一段とモデルが豪華な仕上りとなってくるから実行をおすすめしたい。

図⑤と⑥　生産5,000機目のP-38を記念して真赤に塗装された機体。全面レッド③＋④少量で塗り，機首の左右に黒ふちつきの白文字でYIPPEEと記入されており，主翼下面は図⑤のように，やはり黒ふちつきの白文字がある。主翼上面は左翼に国籍マークがあるだけで全面レッドとなっている。

図⑦と⑧　P-38J第８空軍第20戦闘大隊第79戦闘中隊所属機で，塗装は上・側面がオリーブドラブ⑫，下面ニュートラルグレイ⑬，エンジン部前部と機首の帯が白①＋㉖，垂直尾翼の内側には図⑦のように白でＱの文字がある。

図⑨と⑩　P-38J　第９空軍第370戦闘大隊第401戦闘中隊所属機で，塗装は全面がシルバー⑧，機首の光線反射よけはアンチグレア・グリーン，機首先端は黒で，ブルーと白のチェッカーがあり，主翼の上下面に白と黒のインベイジョン・ストライプスつきとなっており，垂直尾翼の内側には図⑨のようにＮの黒文字つき。右胴体の文字は後部から7FＮの順に記入されている。

（イラストと解説・榎本喜久男）



← 前ページのカラー図①にある第15空軍第27戦闘中隊所属のP-38Jシリアル43-28650機。
1st FG, 27th FS, 15th AF.

↑ 第8空軍第55戦闘大隊第38戦闘中隊のP-38J。上面オリーブドラブ，下面ニュートラルグレイの標準塗装。
55th FG, 38th FS, 8th AF.

KIT :

Do you know the 1/32 scale P-38J kit from Revell? This is one of the most reliable and recommendable kits in Japan. The engine and cockpit panel are elaborate as other Revell deluxe kits. Propeller and wheels are moveable. The upper part of the canopy can also be open. Decals attacked are: "Marge", flown by Major Richard Bong, forty victory score holder, of the 35th Ftr Grp. 5AF; "Virginia Marie" of the 433rd Sq. 5AF; and that of the 370th Ftr Grp. 9AF.

PAINTING :

Fig. 1. P-38J of the 27th Ftr Sq. 1st Ftr Grp. 15AF. Silver overall. The spinner, front part of the air-intake and rear fuselage are Revell Color (RC), 3 and 30, red. Wing tips are also red. The upper surface of the nose is RC-6, 4, 7 and 30, non-glare green. The interior including the inside of the gear cover is RC-27, yellow green. A beauty is drawn on the nose in a real touch.

Fig. 2 & 4. An example is shown where kit enthusiasts can enjoy "P-38 model variation" with this kit. When you remodel the kit into the L-model rocket carrier, as shown here, you can make yourself rocket launchers and rockets (five for each wing) by runners.

Fig. 3. Drop tanks, if made by youself with other stuff than plastic, wood for instance, will make the kit finish more gorgeous.

Fig. 5 & 6. P-38J painted totally in red, in commemoration of the 5,000th P-38 built. Use RC-3 and 4 red. White letters, "YIPPEE" on both sides of the nose are bordered in black. As is in Fig. 5, the same letters on the main wing reverse are also black-hemmed. The wing upper surfaces have a national insignia only on the left wing.

Fig. 7 & 8. P-38J of the 79th Ftr Sq. 20th Ftr Grp. 8AF. The top and sides of the fuselage are RC-12, olive drab. Bottom surfaces are RC-13, neutral gray. Belts on the nose and engine front are RC-1 and 30, white. The inside surfaces of both vertical tails are marked Q in white.

Fig. 9 & 10. P-38J of the 401st Ftr Sq. 370 Ftr Grp. 9AF. RC-8, silver. Nose antireflection paint is non-glare green. Nose tip is black, with a checker pattern of black and white. Black and white invasion strips are on both surfaces of the main wings. Inside surfaces of the vertical tails have "N" marking in black. Letters on the right fuselage read 7EN from the rear.

(Illustration and commentary by Kikuo Hashimoto)

Revell Color for P-38:

RC-1	White	3	Red
4	Yellow	8	Silver
12	Olive drab	6	Green
13	Neutral gray	27	Yellow-green
33	Non-glare black	30	Flat-base
7	Brown	28	Black-iron

P-38の塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	⑫オリーブドラブ
③レッド	⑬ニュートラルグレイ
④イエロー	㉗イエローグリーン
⑥グリーン	㉚フラットベース
⑦ブラウン	㉘黒鉄色
⑧シルバー	㉝黒つや消し



ワシントンのダレス空港で開かれた"トランスポ'72"に展示されたロッキードP-38Lライトニング。いまでも飛行している1機である。

(本文記事参照)

杉の木で造った陸軍機

First prototype of all-wood crew trainer, Ki 107, mf'd at Murakami Works, Tokyo Koku of Niigata pref., Aug. 1944.



東京キ107 全木製基本練習機



東京キ107基本練習機は、わが国独自の技術で開発した全木製軍用機。日本特産の杉を主要構成材としたわが国で初めての純国産の木製軍用機でもあった。

〔123ページ写真〕キ107生産1号機の正面。プロペラは木製2翅（日本楽器製）で、直径2.130m、発動機は公称100馬力、離昇110馬力の「ハ11」11型（日産重工業製）を積んでいた。発動機覆い前面に見える下方の大きな空気取入口は気筒頭部への冷却空気取入口、向って左の四角の孔は気筒部冷却空気取入口と気化器空気取入口を兼ねたもの。その右の縦に細長い孔も冷却用空気孔。下面になかば埋込むように見えるのは滑油冷却器である。発動機覆いは両側面が上方にあけられるようになっていた。

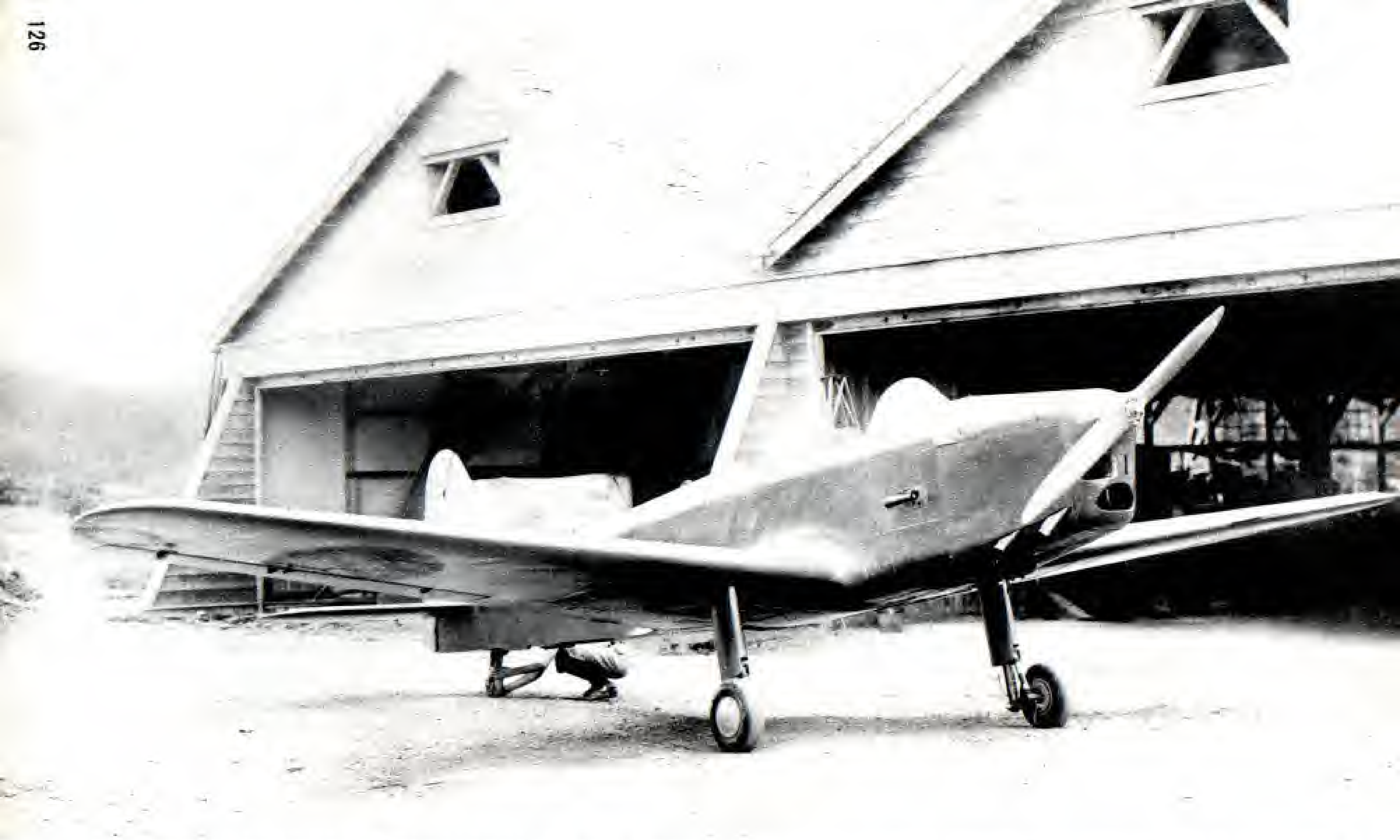
昭和19年8月初めごろ、東京航空村上製作所（新潟県岩船郡村上町字田端・現在村上市）で撮影したもので、左側に見えるのは木機工場。この形の工場が4棟並んでおり、それぞれ木機工場、小骨製作、桁製作、主翼組立てにあてられた。正面に見える建物は食堂兼講堂（青年学校）、その下は製材工場で、その向うに乾燥室があった。

同じく生産1号機の側面（写真上）と左前側面（写真下）。左翼前方に速度計用のピトー管が棒状に突出しており，補助翼蝶番（ちょうつがい）と同支持金具が翼下面に3個見える。中央翼部下面にはタンク収納部の下面覆いが見える。主翼下面後部に見える点検孔は操縦系統整備用である。主脚柱には流線形覆いをつけ，その下部前方に緩衝支柱が見える。主脚柱下方後部に細い曲線状に見えるのは車輪制動操作用ボーデン索である。

後席前方上面の櫓（やぐら）は、転覆時に乗員を保護するためのもの。乗機のさいに右手をかけるために後席後方の胴体上面に半円形の突起が付けられている。翼胴接合部は軽合金板フィレット（整形材）で覆われている。胴体日の丸下部左の矩形部は乗機のさいに右足先をかける部分であるが、発条付き板で常時はふたされている。

尾翼前方の胴体下部に梯形状突起があるのは、胴体後方を持上げて機体を水平におくときの支持台をあてがうためのものである。尾輪部胴体左側には緩衝支柱整備用の点検窓が見える。上の写真で2棟見える右側の工場は桁製作、左の工場では主翼組立てを行なった。





写真上は右斜め前方から見たキ107生産1号機。排気管は2気筒分を1本に合わせて、排出口は2本が左側下方に出ている。下面に滑油冷却器が見える。胴体前方右側面に取付けられているのは旋回計駆動用の負圧を作るためのベンチュリー管である。この写真で主脚機構がよくわかる。

背景に見えるのは、正面写真、側面写真に見られる工場と広い道路を隔てて相対する胴体整備および金属加工工場。また窓ガラスも正面扉もなく、屋根には草があがっている。

同じく右斜め後方から見た1号機。主翼翼端に細長く見えるのは、翼端を押える必要のあるときに手でつかむところ。補助翼中央部で主翼後端に三日月状に見えるのは補助操縦機構の整形覆いである。この写真では尾翼の形状がよくわかる。方向舵下部は胴体断面に合わせた形であり、昇降舵後縁部には操縦席から操作される修正タブが付いている。

背景に見える左側の建物は全体組立て工場、右側は完成後は主翼組立て工場に用いられた。これと同じ形の建物がさらに右に1棟建てられていた。





⬆Ki45 Kai Toryu captured by USAF, shown at Clark Field, Luson, 1945. ⬇This Ki45 Kai was found at Licanan Airdrome, Mindanao, 29 May 1945. (USAF Photos)





南の戦場に放置された日本陸軍機

JAPANESE ARMY PLANES LEFT ABOUT IN SOUTH PACIFIC.

南の島の激戦地に放置された日本陸軍機。大戦末期には、空戦で傷つきあるいは地上で襲われて飛行不能となった数多くの日本軍用機が連合軍の手にわたった。今回はフイリピン周辺の各飛行場で捕われた陸軍機を中心にご紹介しよう。

〔左〕フイリピンのクラークフィールドで米軍の技術諜報隊（ＴＡＩＵ）員の手で整備される２式複戦屠龍（キ45改）。同機行場に比較的損傷が少ない状態で遺棄された１機で、米軍では整備して飛行テストを行なった。1945の撮影。〔左下〕これはミンダナオ島のリカナン飛行場の掩体で捕われた屠龍。これもエンジンその他を整備後、容易に飛行させることができたという。1945年５月29日の撮影。〔下〕同じくリカナン飛行場南端の仮設整備場で発見された100式司偵（キ46）。同機は機体の損傷はひどかったが、エンジンと工場内の整備施設や部品は良好な状態で残されていたという。1945年５月29日の撮影。



Japanese aircraft repair shop at Licanan Airdrome, Mindanao. Shown background is a completely wrecked Ki46 "Dinah," 29 May 1945. (USAF Photo)



Ki43 Hayabusa found at the airstrip on Cape Gloucester, 1 April 1944.

[上]ニューブリテン島のケープグロースター飛行場の1式戦隼（キ43）。1944年1月4日の撮影で、いち早く進駐した米海兵隊員が撮影したもの。尾翼の記号から飛行第1戦隊の所属機と思われる。[下]上と同じくケープグロースターのキ45改屠龍。飛行第13戦隊の所属機である。アメのように曲ったプロペラ。不時着したものであろう。1944年1月2日の撮影。[右上]フイリピンのセブ島ウボンの飛行場で押収された4式戦疾風（キ84）。1945年5月の撮影。[右下]屠龍の胴体下に装備された37mm砲（ホ203）のクローズアップ。ケープグロースターで発見された機体のものである。1944年1月4日の撮影。





←Captured Ki45 Kai Toryu of No. 13 Sentai at the airstrip on Cape Gloucester. (USMC Photo) ↑Ki84 Hayate kept intact on Upon Strip, Cebu, Philp. May 1945. (USAF Photo) ↓Close-up of 37mm Ho-203 Cannon mounted on a Ki45 Kai Toryu, found on Cape Gloucester, 4 Jan. 1944. (USMC Photo)









〔上〕これもケープグロースターに放置された99式襲撃機（キ51）。かなり損傷のはげしいメロメロ迷彩機。1943年12月29日の撮影。
〔下〕クラークフィールドでろ獲された99式双発軽爆撃機（キ48）。この機体も米軍の技術諜報隊員の手で整備され、飛行テストが行なわれた

⬆Mitsubishi Ki51 "Sonia" found on Cape Gloucester, 29 Dec. 1943. (USMC Photo)
⬇Ki48 Twin-engined Light Bomber shown at Clark Field as it awaited repair put into flying condition by Technical Air Intelligence Unit, 1945. (USAF Photo)





〔上〕フイリピンのネグロス島バコロド飛行場で米軍の手に入った3式戦飛燕1型（キ61-1）。1945年5月16日の撮影で、左側の1機はエンジンがはずされている。1945年5月16日の撮影。

〔下〕これはクラークフィールドでろ獲された97式重爆（キ21）。機体にカムフラージュの草木を載せたままでスクラップ寸前。1945年の撮影。

⬆Ki61-I Hien found on Bacolod Airfield, Negros, Philippine. The plane on the left had its engine removed before captured, 16 May 1945. (USAF Photo) ⬇Destroyed Ki21 Heavy Bomber on Clark Field, Luson, 1945. (USAF Photo)







空母に乗ったサンダーボルト

サンダーボルトが太平洋の戦場に投入されたのは1943年末、ニューギニア戦線が最初であった。オーストラリアから同方面に派遣された第5空軍の第348戦闘大隊が本機で上陸援護や対地攻撃でめざましい働きをし、部隊感状を授けられて以来、本機は第5、7、20空軍各戦闘部隊の重戦として、強力な火器と長大な航続力を生かして爆撃機援護・戦闘爆撃に広い戦場を飛びまわった。133～136ページの写真は空母に積まれたサンダーボルトの珍しいスナップ。





リパブリック P-47D サンダーボルト

REPUBLIC P-47D THUNDERBOLT



空母マニラベイでハワイからサイパンへ運ばれる第7空軍第318戦闘大隊第73戦闘中隊のP-47D。第318戦闘大隊は1944年6月から本機を持ってマリアナ方面に展開。サイパン、テニアン、グァム地区の地上部隊の支援にあたったが、写真はその展開途上のもの。各機とも空母を離艦してサイパンの基地に移駐した。写真左と下は主脚にカタパルトの鋼索をセットして発進準備完了。左下は離艦した瞬間。1944年6月23日の撮影。(USAF Photos)







ここの３枚も空母マニラベイでサイパンまで運ばれた第73戦闘中隊のＰ-47Ｄ。同艦からの発進の模様で、左の写真ではカタパルトの鋼索がはずれて、まさに艦を離れんとするところ。（ＵＳＡＦ photos）



水滴型風防のサンダーボルト



P-47サンダーボルトは後方視界のためにD型のブロック・ナンバー"25"以降の機体を水滴型風防に改めた。これは各戦線で活躍した同風防のP-47D。〔上〕1944年11月から第1戦術空軍。（1stTAF）に編入されてドイツ上空で闘った第9空軍第358戦闘大隊第367中隊のP-47D-28RE。



〔上〕フイリピンのクラークフィールド飛行場で作戦中の第5空軍第58戦闘大隊のP-47D-28-RE。左手のシリアル44-33710の機体はメキシコ遠征空軍の第201戦闘中隊の所属機である。右主翼上面とラダーのマークに注意。同中隊は1945年初めにP-47Dでの訓練を終えて米空軍とともにクラークに進出した。〔下〕イタリー戦線で活躍した12空軍のP-47D。





〔上〕部隊感状を3回も受けている第9空軍第358戦闘大隊のP-47D。1944年12月から45年1月にかけて、第1戦術空軍（TAF）に編入されて作戦中のシーン。ドイツ上空の攻撃を終えて帰投、雪のタクシイ・ウェイを整備員の誘導で滑走中。



〔上〕フイリピンのマルガンデン飛行場に着陸した第5空軍第58戦闘大隊のP-47D-28-RE。胴体の文字は"Princess Margie"。
〔下〕一列になって滑走路へ。第9空軍第354戦闘大隊第353戦闘中隊のP-47D。バルジの戦いで地上攻撃に出動するところ。





〔上〕サベナ・ベルギー航空が，カラベルⅣにつづいて1967年に導入した3発の中距離ジェット旅客機ボーイング727-29。サベナでは本機を5機購入したが、写真の機体は1967年4月から就航した1番機(00-ＳＴＡ)。同航空の中距離旅客機は，ダグラスＤＣ-3、コンベア・ライナーとメトロポリタン、カラベルⅣからボーイング 727とつづいた。

〔下〕近距離路線用に1969年に導入したターボプロップ双発のＦ.27フレンドシップ。サベナでは2機のフレンドシップを購入したが、写真はブラッセル空港における1番機（00-ＳＣＡ）である。

エアラインの翼

SABENA　ベルギー航空　⑨



グローブマスターが追加された



韓国の“航空博物館”



②

本誌昨年7月号で紹介した韓国のソウル特別市汝矣島(ヨイドー)の5.16広場にある“屋外航空博物館”に、こんど新しくC-124Cグローブマスターが加わった。B-29につづいて4発の大型機がこれで2機。同広場は着々と東洋一の航空博物館としての態様をととのえつつあり、航空ファンたちのメッカに成長しつつある。

今回購入したC-124C(シリアル52-943)はオクラホマ州ナショナル・ガードで現役として飛んでいた1機。この博物館を誕生させた韓国参戦国協会理事兼事務総長の池甲鍾氏の努力が実って、除籍させて同博物館へ空輸させることに成功したもので、同機は1月12日にオクラホマ・シテイを出発、ロサンゼルス、ホノルル、ミッドウェイそして横田基地を経由して、1月18日、汝矣島の滑走路にぶじ着陸、ただちにB-29と並んで展示された。

ソウル郊外のハン川に浮かぶ特別市汝矣島には、現在国会議事堂が建設されており、今後韓国のマンハッタンとして市庁などの高層建築が立ちならぶ新市街の建設が予定されているところ。来るべき世代に歴史を語る記念品、航空機の博物館としては、絶好の地でもあるわけで、今後の充実が期待される。

Globemaster Arrives in Seoul for Permanent Exhibit.



③





ー⑥は5.16広場の"航空博物館"
したグローブマスター。②は1
日、汝矣島上空に姿を現わした
、同日午後3時ちょうどに着陸
(⑤)。③は同機を空輸してきた
軍乗員たちと韓国空軍の将官た
記念撮影。左端が池甲鐘氏。こ
同博物館の展示機はP-51、T-6、
D、B-29、C-124Cと全部で
となったが、今年の春からはさ
F4Uコルセア、F9Fクーガ
B-26が仲間入りする。



